

漢訳雜阿含考

伴 戸 昇 空

本小稿は、漢訳雜阿含經（求那跋陀羅訳・五十卷）の所属部派に關して、従来の諸研究の成果に、いささか私見を附加せんとしたものである。

現存する漢訳雜阿含經（五十卷）の所属部派に關しては、諸部通誦説⁽¹⁾・大衆部説⁽²⁾・化地部説⁽³⁾・有部説⁽⁴⁾の都合四説がある。しかし、雜阿含經の組織内容・教理等から見て、前三説には無理があるように思われる。中国への原典伝來経路等に関しては疑問が残るものの、現存する雜阿含經の所属は有部系の部派であつたと見て、まず間違いないところと思われる。有部系と考えられる根拠は、列挙して示せば、次の如くである。

(一)明治四十一年に、姉崎正治氏は、当該雜阿含經の錯綜せる巻次を再配列復元し、その組織内容が根本説一切有部毘奈那雜事卷三九及び有部の影響を受けたと思われる瑜伽師地論卷八五に記されている内容と近似していることを見出だされ、以来、この点を根拠として諸学者は、当該雜阿含經を、

有部もしくは有部に近い部派の所伝と見なしている。四分律卷五四、五分律卷三〇、摩訶僧祇律卷三二、並びに先述の根本説一切有部毘奈那雜事卷三九、瑜伽師地論卷八五等の伝える雜阿含經の組織内容に關する記述から、諸部派の伝持した雜阿含經は必ずしも同一内容のものではなかつたと考えられるからである。そして、当該雜阿含經の組織内容は有部系の傳承に近似していたのである。雜阿含經の組織内容が部派によって異なつていたといふことは、当該雜阿含經の所属部派を推定する上で最も大きな手懸りであると言えよう。因に、後に水野弘元氏が別訳雜阿含經の所属を化地部もしくは法藏部と推定されているのも同様の根拠に依るのであり、この手懸りの有効性は今でも生きていると言えるであらう。

(二)十二部經の列挙順序は部派によつて異なる傾向にあるが、雜阿含經（一一三八）のそれは婆沙論（大二七・六五九c）・毘婆沙論（大二六・九八一b）等有部系論書中に見られるものと合致する。即ち、修多羅 (sūtra)・祇夜 (geya)・受記 (vyākara-

rainā)・伽陀 (gāthā)・優陀那 (udāna)・尼陀那 (nīdāna)・阿波陀那 (avādāna)・伊帝目多伽 (itivṛtaka)・闍多伽 (jātaka)・毘富羅 (vipulva)・阿浮多達摩 (adhvudharma)・優波提舍 (upadesa) の順で記され、これらの文献はともに伝承系統を同じくするものの如くにうかがわれる。

(三) 説一切有部の大看板、三世実行説の経証として俱舍論(大二九・一〇四b)・順正理論(大二九・六二五c)に引用される経文が雜阿含經(七九)にあり、且つ、所引の部分には有部的増広と考えられる形跡がある。即ち、雜阿含經(七九)には、過去未來現在三世の五蘊の無常を説くに続いて、三世の五蘊が有に非ざれば修行の対象が無くなる故に、それは有であると記されている。パーリ文相当經(SN. 22. 9)には唯、三世の五蘊の無常が説かれていただけであり、その有無を云々するものよりも無常のみを説くものの方がより本来的な姿であると判断されよう。パーリ文が元來雜阿含經の如くあった経の内容を省略したとは考えられない以上、雜阿含經の方が後に、三世五蘊の有を説く部派によって、その内容に増広が施されたと考えるのが順当と思われる。

(四) 説一切有部では、苦法智忍より道類智まで次第に十六心の段階を設けて、四聖諦漸現觀を説くが、これは雜阿含經(四三三)に「此四聖諦、漸次無間、非頓無間等」とあるに通ずる。

(五) 同じく説一切有部では、十八界の中、意・法・意識は有漏無漏に通じ、他は唯有漏であるとす¹²⁾が、この所謂前五界唯有漏の義が雜阿含經(二二九)に説かれている。

猶、上記三点は、異部宗輪論(大四九・一六a)等によって、説一切有部の正義であると同時に化地部・大衆部の執に反するものであることが確認される故、この点からも該雜阿含經は化地部や大衆部の所伝ではなく、説一切有部系の部派によって伝持されたものと考えてよいと思われるのである。

ところで、一口に有部と言ってもその内部には種々の異説があったことが、婆沙論中の諸記述から知られ、又、異部宗輪論にも、有部の「末宗異義、其類無辺(大四九・一六c)」とあること周知の如くである。そこで、當該雜阿含經が有部系部派の所伝であるとしても、もう少しその範圍を絞ることにはできないだろうか。一般に、有部と言うと、婆沙論等によって知られるカシュミール系有部が想起されるであろう。しかし、當該雜阿含經は、カシュミール系有部よりは根本説一切有部に近似すると思われる節がある。その点を次に列挙して記してみよう。

(a) 當該雜阿含經を有部系と見なす第一の根拠は、その組織内容が根本説一切有部毘奈耶雜事卷三九、及び瑜伽師地論卷八五に伝えられる記述と近似する点にあること、先述の如く

である。あらためて述べるまでもなく、この根本説一切有部毘奈耶雜事は根本有部の文献である。又、瑜伽師地論も、その四阿含の列挙順序が「雜・中・長・増一(大三〇・七七二c)」となっており、これは薩婆多毘尼毘婆沙等の「増一・中・雜・長(大三・五〇三c~五〇四a)」よりも、むしろ根本説一切有部毘奈耶雜事の「雜・長・中・増一(大三四・四〇七b~c)」の方より近似しているところから、根本有部系の伝承を記しているのではないかと思われる。さすれば、これらの文献に記されている雜阿含經の組織は、ともに根本説一切有部系の伝承ではないかと思われるのである。もっとも、すべての有部系諸部派が同様の組織を持った雜阿含經を伝持していたとも考えられようが、その点に関しては詳らかでない。

(b) 雜阿含經(一三二)に「憂陀那・波羅延那・見真諦・諸上座所說偈・比丘尼所說偈・戶路偈・義品・牟尼偈・修多羅」とパーリ小部中の諸經を列挙するが如き記述が見られる。この經文は、宇井伯寿氏が有部としては問題がある旨を指摘されて以来、諸学者によって何度かとり上げられて来た。これら諸經の中「義品」に関しては婆沙論等(大二七・一七a、同一七六a、大二九・三b等)にも見出だされる。しかし、雜阿含經(一三二)の如き体裁をもって列挙される記述は出てこない様である。ところが、これと近似した記述が根

本説一切有部毘奈耶葉事に見られ、「嚙拏南頌・諸上座頌・世羅尼頌・牟尼之頌・衆義經等(大三四・一a~b)」とあり、さらに又、根本有部と密接な関係にあると言われる *Di-vyāvadana* 26 “*udanat pāṭayanat satyadīśh sthviragāhā sālagāhā munigāhā arhavarigiyāni ca sūtrāni* (Cowell, p. 34)”と出て来る。従って、カシュミール系有部等ではこれら諸經を列挙して記することがなかったとしても、根本有部の系統ではこの様な体裁で記することがあったと思われる。

(c) 雜阿含經(八六六)では色界初禪天を「梵身天・梵輔天・大梵天」と三分している。これはカシュミール系有部が大梵天と梵輔天を一処と見て初禪天を二処とするに反するが、根本説一切有部毘奈耶等では「梵衆・梵輔・大梵(大三・八三五b)」の如く三処としている。因に、俱舍論(大二九・四一a)等に依れば色界初禪天を二処とするのはカシュミール系有部だけであつたらしく、雜阿含經同様有部系と言われる中阿含經も「梵身天・梵富樓天(大一・四七八a)」と初禪を二処としているから、こちらの方はその系統に属すると思われる。

(d) 雜阿含經(八六六、八六八~八七〇)では色界初禪天乃至四禪天に各三天を配し、淨居天を四禪天に含ませていない。一方カシュミール系有部では四禪天に、無雲天・福生天・広果天の他に、無煩・無熱・善現・善見・色究竟の五淨居天を

含めて、都合八天を配している。¹³⁸これは雜阿含經(八七〇)に四禪天を「小福天・福生天・因性果実天」のみとする記述とは結びつき難いと思われる。ところが、根本有部系の文獻と考え得る Mahāvastu (3097~3100) には、四禪天に無雲天・福生天・広果天の三天のみを配し、淨居天とは一線を画して記されているから、雜阿含經(八七〇)の記述はこちらの方と通ずるものと思われる。

(e) 雜阿含經(四二四~四二六)に「世界中間闇冥之処」という記述があるが、カシュミール系有部には「世界中間」なる概念が見出だせない。「世界中間」の原語は lokantara もしくは lokantara であると思われる。ところが、Abidharma-kośābhāṣya (Pradhan, p. 186) に十方界一仏を説く所で “anyalokadhātu” 或は “lokadhātumantara” とあるを、真諦の俱舍釈論ではともに「余世界(大二九・二二二c)」と訳しており、ここでは “antara” を “anya” と同義に用いている。又、同じく、世界の成立を述べる所では、化地部の契經を引き “lokantara” (ibid, p. 189) と記するを、“余現成世界(大二九・二二四a)”と訳している。¹³⁹これらの箇所を順正理論では「余世界(大二九・五二五a)」、「他方(同五二六c)」とするのであるから、カシュミール系有部等では lokantara なる語を「他の世界体系」の意味で用いていたことが分かるのである。カシュミール系有部等では風輪の規模を無量 (asamkhyā)

と考えたことよって、分別上座部等とは異なり、「世界中間」なる具体的な表象が発達し難かったと思われる。¹⁴⁰一方、根本説一切有部毘奈耶(大二三・七一九a)、同雜事(大二四・二九七c)等には、如來出現時の未曾有事の一事として、日月の光も及ばぬ「世界中間闇冥之処」に光明が行き渡るとの記述があつて、パーリ文 (SN. V, p. 454; AN. II, pp. 130~131; etc.) とほぼ同一の表現を採用している。即ち根本有部には「世界中間」という概念がとり入れられていたということになる。因に、如來出現時の未曾有事を中阿含經に見ると「是時震動一切天地、以三大妙光普照三世间乃至幽隱諸闇冥処、無有障礙」(大・四七〇a)とあつて、婆沙論(大二七・六二七c)等と同じく、「世界中間」なる表現は出て来ない。一方、同じく有部系文獻と言われている Lalita-vistara (Lehmann, p. 41, etc.) にはパーリ文、根本有部諸文獻等と同様な表現が見られ、これはカシュミール系有部の伝承ではないかもしれない。

以上の如き諸点より、当該漢訳雜阿含經の原本が有部系の伝承であることはほぼ間違いないところと思われる。ことに、それはカシュミール系有部よりも、むしろ根本有部系の部派によつて伝持されたものではないかと考えられるのである。(註省略)